

ISSN 0287-7902 (京産大論集)

ISSN 0287-9735 (外国語系)

# フランス語の関係節における 文体的倒置について

平 塚 徹

京都産業大学論集

外国語と外国文学系列 第 29 号

平成 14 年 3 月

# フランス語の関係節における文体的倒置について\*

平塚 徹

## 要 旨

主節平叙文において倒置主語が焦点であることは明らかである。しかし、以下の論拠により、フランス語関係節の倒置主語は焦点であると考えすることはできない。1) 制限的關係節は、通常その内容が前提されており、焦点を含みえない。2) 關係節の倒置主語は、主節平叙文の倒置主語と異なり、前方照応的に解釈することができる。3) 關係節においては、1~2語からなる主語のなかでは、固有名詞や人間を指す単数の主語が倒置しやすい。4) 關係節においては、倒置主語の後に容易に前置詞句や副詞句が現れうる。以上より、關係節の倒置主語は焦点ではないと結論できる。

關係節においては、**individuation** の高い主語の方が、そうでない主語よりも倒置しやすい。このことから、以下の仮説を提案する。制限的關係節においては、主語が動詞よりも先行詞の指示対象の確定に寄与しており、かつ、動詞が主語と先行詞の間の関係を表しているにすぎない場合に文体的倒置が可能となる。

フランス語關係節における文体的倒置に対するこの制約は、名詞句の指示対象の確定に対する寄与が大きい要素ほど名詞句内の右方に来て、寄与が小さい要素ほど左方に来るといふ通言語的傾向の現れとして理解できる。この傾向は、以下の現象において観察される。1) 多くの言語において、不定代名詞は、それを修飾する形容詞に先行する。2) ロマンズ諸語において、外延を狭めない形容詞は、名詞に先行する。

キーワード: フランス語、文体的倒置、關係節、不定代名詞、語順

## 1. はじめに

文体的倒置を適用された主語が焦点であることは、ほぼ定説と認めてよい。フランス語においても、東郷・大木(1986)は、以下の倒置構文では主語名詞句が焦点になっていることを確認している。

- (1) *Eclata la guerre.* (東郷・大木, 1986, p.1)
- (2) *Derrière les cavaliers marchaient les soldats.* (*ibid.*)

しかし、倒置主語が焦点であることは、主に主節平叙文を対象にして論じられてきた。これに対して、フランス語では、疑問詞疑問文や関係節においても、文体的倒置が頻繁に見られる。

- (3) *Et où habite ce seigneur ?* (Dumas, A., *Le Comte Monte-Cristo*, in *DISCOTEXT 1*)
- (4) *nous sommes là dans le quartier où habite votre ancienne maîtresse ;* (Murger, H., *Scènes de la vie de bohème*, in *DISCOTEXT 1*.)

問題は、これらの環境における文体的倒置も主語の焦点化と考えてよいかである。平塚(近刊)では、疑問詞疑問文において文体的倒置を適用された主語が焦点ではないことを示した。本稿では関係節においても倒置主語はやはり焦点ではないことを主張する。

以下、第1節では、関係節の倒置主語も焦点であるとする仮説を支持する論拠を見る。第2節では、関係節の倒置主語が焦点だとする仮説の問題点を提示する。第3節では、関係節において文体的倒置を引き起こす要因について仮説を提案する。第4節では、この要因が、名詞句内での語順に関する通言語的な傾向の現れと考えられることを論じる。

## 2. 焦点化説の根拠

### 2.1. 主語

主節平叙文においては長い主語ほど倒置しやすいことは広く認められている。これは、長い主語ほど焦点になりやすいので、倒置しやすいのだと説明される (cf. Jonare, 1976, p.28; Fournier, 1997, pp.104-105)。

同様に関係節においても、主語が長いほど文体的倒置が適用されやすい。Fuchs (1997, pp.152-154) は、*Le Monde* の 1994 年 2 月 18 日号から採集した名詞句主語を含む関係節のコーパスにおいて、正置主語の平均語長は 3.29 語であるのに対して、倒置主語の平均語長は 7.26 語だったと述べている (その他に、Grevisse (1986, p.1612)、Wall (1980, pp.81-90) も参照されたい)。長い主語ほど焦点になりやすいのだから、この事実は倒置主語が焦点であることを示唆する。

また、Fuchs (1997, p.154) は、主語が不定代名詞・指示代名詞・所有代名詞だと文体的倒置が適用しにくいことを指摘して、これを代名詞が *rhème* になりにくいからと説明している。この説明は、倒置主語が焦点であるとする考え方と同じである。

### 2.2. 動詞

動詞に助動詞・否定辞・法の標識が付加されて長くなるほど、文体的倒置は困難になる (Nordahl, 1973, p.119; Fuchs, 1997, pp.155-156)。特に、Fuchs は文体的倒置が適用されている場合には、動詞の部分は三つ以上の要素を含むことはほとんどないと述べている。例えば、次のように要素が二つの場合には文体的倒置が見られる。

- (5) *Autre enjeu spéculatif : les abords de la gare du Midi, où doit débouler le TGV*  
(*Le Monde*, in Fuchs, p.156)

これに対して、以下の例のように三つ以上の要素がある場合には正置が見られるのである。

- (6) Nouveau coup dur la semaine dernière quand les Etats-Unis, *sur lesquels la Grèce pensait pouvoir s'appuyer*, décident à leur tour de reconnaître la FYROM, une reconnaissance suivie, mardi dernier, par celle de l'Australie, où vivent un demi-million de Grecs (*Le Monde*, in Fuchs, p.156)
- (7) Or, tous les auteurs du recueil ont pris garde d'éviter ce piège assez grossier, où *Monsieur Edelman s'évertue à vouloir les faire tomber* (*Le Monde*, in Fuchs, p.156)

動詞部分が複雑なほど多くの情報を含んでおり焦点となりやすいので、逆に主語は焦点になりにくいと考えられる。よって、上述の現象は倒置主語が焦点であることを示唆している。

他方、Blinkenberg(1928)は、動詞の種類によっても文体的倒置が適用できる可能性が変わってくることを指摘している。先ず動詞がコンピュータ être の場合には、通常、文体的倒置が適用される(pp.115-116)。また、exister, se trouver の他、主語の指示対象の存在を表す動詞の場合にも、文体的倒置が適用されているものが多い(pp.116-117)。更に、動詞が先行詞によって予想されて、意味的に重要でない場合にも文体的倒置が適用されやすい。

(8) le journal que lit M. Chantal (Blinkenberg, 1928, p.117)

(9) la vie que menait la noblesse (*ibid.*)

ここでは、動詞 lire や mener は意味的に軽く、ほとんどの場合以下のように言い換えられるほどである。

(10) le journal de M. Chantal (Blinkenberg, 1928, p.117)

(11) la vie de la noblesse (*ibid.*)

Fuchs(1997, pp.157-158)も同様の言い換えの例を挙げている。以上のような動詞は全て意味内容が乏しく焦点になりにくいので、逆に主語の方が焦点にな

りやすく、文体的倒置が適用されやすいと説明することができる (cf. Fuchs, 1997, pp.156-159)。

### 2.3. 直接目的語名詞句

直接目的語名詞句も関係節における文体的倒置を妨げる (Grevisse, 1986, p.1613; Nordahl, 1973, p.122; Fuchs, 1997, pp.145-147)。例えば、Nordahl は、(12) の関係節に文体的倒置を適用した (13) や (14) は、かなり容認度が低下すると述べている。

(12) Lénine promettait de bâtir un Etat dans lequel les cuisinières exerceraient les plus grandes responsabilités. (Nordahl, 1973, p.123)

(13) (...) dans lequel exerceraient les cuisinières les plus grandes responsabilités.  
(*ibid.*)

(14) (...) dans lequel exerceraient les plus grandes responsabilités les cuisinières.  
(*ibid.*)

これに対して、主節平叙文においても、直接目的語名詞句がある場合、文体的倒置が困難であることが知られている (東郷・大木, 1986, p.6; Fournier, 1997, p.108-109)。

(15) Là surveillaient une dizaine de gendarmes le magasin.

(++) (+) (0) (-) \*\*\*\* (--) \*\*\*\*\*

(東郷・大木, 1986, p.6)<sup>1)</sup>

(16) Là surveillaient le magasin une dizaine de gendarmes.

(++) (+) (0) (-) \*\*\* (--) \*\*\*\*\*

(*ibid.*)

これは、東郷・大木(1986, pp.6-8)によると以下のように説明される。まず、倒置された主語は焦点として解釈される。ところが、直接目的語も焦点とし

て解釈されやすい。よって、両者が共存すると、どちらを焦点にするのかストラテジー上の矛盾が生ずるために不自然になるのである。そうすると、関係節において直接目的語を伴う文体的倒置の容認度がかなり低いことにも、同じ説明が適用できると考えられる。

#### 2.4. 導入される要素

Fuchs (1997, p.160) は、後置要素は *rhème* として、前置要素は *thème* として考えることにより、関係節での文体的倒置を捉えようとしている。そして、このことを正置の場合と倒置の場合とで導入される要素の違いによって、例示している。まず、次の倒置文では、先行詞から位置づけを表す動詞により、*rhème* である倒置主語が導入されていると考えられる。

- (17) *Il regarda longtemps la flèche du mât de hune écrire des signes invisibles dans le ciel bleu où s'était égaré un fin croissant de lune en porcelaine translucide*  
(Tournier, in Fuchs, 1997, p.160)

これに対して、次の正置文では、関係節内の主語は *rhème* である述語を導入するための *thème* として機能している。

- (18) *Un bon hôtel doit être celui dans lequel un client doit pouvoir sortir s'il a envie de sortir, et ne pas sortir si sortir est pour lui une corvée.* (Perec, in Fuchs, 1997, p.160)

このような Fuchs の見方も、関係節の倒置主語を焦点と見なす考え方と同じである。

#### 2.5. 対比されている要素

丹羽 (1982) は、フランス語の関係節における倒置主語が焦点であることをしめす証拠として、以下の例を挙げている。

(19) \* Elle a reçu le cadeau que Jean avait envoyé, non pas Paul. (丹羽, 1982, p.32)

(20) Elle a reçu le cadeau qu'avait envoyé Jean, non pas Paul. (*ibid.*)

ここでは、関係節内の主語 Jean は Paul と対比されており、その意味で焦点であると考えられるが、それには文体的倒置が適用されなければならない。よって、倒置主語は焦点であると考えられる。

Fuchs (1997, p.161) も、主語が倒置された次の例文は、主語が un voleur ではなく un client、あるいは deux clients ではなく un client という対比が想定されないと発話できないと述べている。

(21) Un bon hôtel doit être celui *dans lequel peut entrer un client* (Fuchs, 1997, p.161)

これに対して、主語が倒置されていない次の例文では、太陽が沈むのではなく、沈まないという対比を構築できる。

(22) Le Club est longtemps une entreprise profitable, bientôt une multinationale, *sur laquelle le soleil ne se couche plus* (*ibid.*)

以上のように、主語の倒置が、主語に対して対比的な解釈をもたらすなら、これは倒置主語が焦点になっているという仮説を支持する。

## 2.6. まとめ

関係節における文体的倒置には、主語・動詞・直接目的語に対して、主節平叙文の場合と類似した制約が認められる。また、関係節の倒置主語は導入されたり、対比されたりして、焦点として機能していると思われる例もある。このように、関係節での文体的倒置が主語の焦点化であるという仮説には、利点が多い。しかしながら、この仮説には問題点がある。次節ではこのことを見る。

### 3. 焦点化説の問題点

#### 3.1. 関係節と断定

英語においては、文体的倒置は主節平叙文において見られる主節現象であり、関係節のような従属節では普通容認されない。

(23) \* The rotunda in which stands a statue of Washington will be repainted. (Hooper and Thompson, 1973, p.489)

文体的倒置が断定を伴っているのに対して、従属節の内容は前提されていることが多い。そのため、従属節に文体的倒置を適用すると、前提されている内容を断定することになり、矛盾を生ずるのである。

しかしながら、Hooper and Thompson(1973)が明らかにしたとおり、関係節であっても非制限的用法の場合には文体的倒置が可能になる。

(24) The rotunda, in which stands a statue of Washington, will be repainted. (*ibid.*)

非制限的關係節の内容は断定されているために、断定を伴う文体的倒置を容認するのである<sup>2)</sup>。

以上のように、英語では、文体的倒置は従属節においても見られるものの、その場合には、従属節の内容が断定されているという条件を満たしていなければならない。

ところが、フランス語の場合には、様々な従属節において文体的倒置が広範かつ頻繁に見られる。しかも、明らかに、断定を伴わない場合においても文体的倒置が観察されるのである。例えば、次の関係節を含む文を見られたい。

(25) Celle qu'aime François, c'est Marie.

ここでは、先行詞の指示対象は関係節の内容によって確定するので、関係節は制限的用法であり、その内容は前提されている。それにもかかわらず、文体的倒置が可能なのである。よって、フランス語では、断定を伴うことは、文体的倒置を適用することの必要条件とはなっていない。焦点は断定されている領域に現れると考えられるので、フランス語の関係節における文体的倒置は主語の焦点化とは考えられない。

### 3.2. 主語の前方照応性

関係節での倒置主語と主節平叙文での倒置主語は、前方照応的に解釈できるかどうかで異なっている。

(26) Il prédit que le roi allait mourir bientôt.

- a. Le lendemain cet événement arriva.
- b. Cet événement arriva le lendemain.
- c. \* Le lendemain arriva cet événement.

ここでは、後続する文の主語は先行する文の補文の内容を受けているが、(c)の文体的倒置は容認されない。これに対して、次のように後方照応の場合には文体的倒置が容認される。

(27) Le lendemain arriva cet événement : le roi fut assassiné par un jeune étranger.

これは、倒置主語が焦点であると考えると自然に説明できる。ところが、関係節においては、以下のように前方照応が可能である。

(28) Le roi mourut en 1300.

- a. Le jour où arriva cet événement, le prince était en voyage à l'étranger.
- b. Le jour où cet événement arriva, le prince était en voyage à l'étranger.

このことは、2.4 で述べた倒置主語が導入されているという議論が一般に成り立っていないことを示しており、関係節における倒置主語が焦点でないことを示唆している<sup>3)</sup>。

### 3.3. 主語の指示対象

文体的倒置一般については、有生の主語より無生の主語の方が倒置しやすい。例えば、自動詞を含む文体的倒置を扱った Gildin (1980, pp.69-70) の以下の統計を見られたい。

表 1: 主語の有生性と倒置 (Gildin, 1980, p.69)

	有生	無生
正置	308 (59%)	214 (41%)
倒置	11 (26%)	31 (74%)

( $p < .01$ )

Atkinson (1973, pp.18-21) の統計でも、倒置構文では有生主語が 151 例だったのに対して、無生主語は 810 例と圧倒的に多い。更に、文頭に前置詞句を伴った主節平叙文における文体的倒置を扱った Fournier (1997, p.107) も、倒置主語は無生のものが多くと述べている。このような傾向は、有生主語が無生主語よりも主題になりやすいと考えることによって理解できる。つまり、その分、無生主語の方が焦点になる確率が高いので、倒置されやすいのである。

また、Gildin (1980) は、定名詞句の方が不定名詞句よりも、正置されやすいことを示している。

表 2: 主語の定性と倒置 (Gildin, 1980, p. 69)

	定	不定
正置	420 (80%)	102 (20%)
倒置	18 (42%)	24 (58%)

( $p < .01$ )

この結果は、定名詞句は不定名詞句よりも主題になりやすいと考えることによって説明できる。更に、Gildin(1980)は、単数の主語の方が複数の主語よりも、正置されやすいと述べている。

表3:主語の数と倒置(Gildin, 1980, p. 70)

	単数	複数
正置	385 (74%)	137 (26%)
倒置	25 (60%)	17 (40%)

( $p < .05$ )<sup>4)</sup>

これも、単数名詞は複数名詞よりも明瞭な指示対象を有するために主題になりやすいと考えることによって説明できる。

以上の統計は、必ずしも主節平叙文に限ったものではないが、主節平叙文における文体的倒置の様相をかなり反映していると考えられる。これに対して、関係節に限定して文体的倒置を観察すると、以上とはかなり異なった傾向が出てくる。

Wall(1980, pp.83-84)は、関係節における1~2語からなる主語を統計的に調査した結果、固有名詞が倒置されやすい傾向があると述べている。Wallの統計では、主語の種類や主語と動詞の相対的長さによる細かい分類をして倒置と正置の数を挙げている。ここでは、固有名詞と倒置の相関性を確認するために、主語が固有名詞のものと同普通名詞のものという二種類にまとめて、倒置している例と正置している例の総計を計算した<sup>5)</sup>。

表4:固有名詞と倒置(Wall(1980, pp.83-84)に基づく)

	固有名詞	普通名詞	計
倒置	98 (81%)	274 (68%)	372
正置	23 (19%)	129 (32%)	152
計	121	403	524

( $\chi^2=7.02, p < 0.01$ )

この統計より、主語が固有名詞の場合は、普通名詞の場合に比べて有意に倒置している率が高いことが確認できる<sup>6)</sup>。

また、Wall (1980, p. 84) は、統計的数値は示していないが、人間を指す単数の名詞句が倒置する比率が高いとも述べている。Fuchs (1997, p.155) も、人間を指す主語は、非生物の主語より倒置しやすいと述べている。Fuchs が *Le Monde* から採集したコーパスでは、倒置主語の 42 例のうち 60% 近くが人間を指す主語であったのに対して、正置主語では 115 例のうち 32% にすぎなかった。

固有名詞や人間を指す名詞が主題になりやすいことを考えると、このような傾向は、関係節における倒置主語を焦点と見なす考え方では、説明が困難である。

他方、Wall (1980, pp.83-84) の 1~2 語からなる主語の正置と倒置に関する統計を、定名詞句主語と不定名詞句主語という分類にまとめ、倒置している例と正置している例の総計を計算したところ、定名詞句主語の方が倒置している率が高かったものの、有意な差は認められなかった<sup>7)</sup>。

表 5: 定性と倒置 (Wall (1980, pp.83-84) に基づく)

	定	不定	計
倒置	330 (89%)	42 (79%)	372
正置	141 (11%)	11 (21%)	152
計	471	53	524

( $\chi^2=1.53, p < 0.25$ )

主節平叙文においては不定名詞句の方が焦点になりやすいために倒置する率が高いと考えられる。しかし、関係節では少なくとも主語が短いときには、このような傾向は現れなかった。このことも、関係節においては倒置主語が焦点でないことを示唆している。

以上のように、関係節における倒置主語は一般の倒置主語と異なる様相を呈している。よって、関係節での文体的倒置を主節平叙文における文体的倒置と同じように見なす考え方には問題があると言える。つまり、関係節における倒置主語が焦点であるとする考え方には疑問があるのである。

### 3.4. 倒置主語に後続する要素

主節平叙文においては、文末に他の要素が現れると容認度が低下する。

- (29) *Juste à ce moment-là est entrée Alice.* (東郷・大木, 1987, p.4)  
 (30) ?? *Juste à ce moment-là est entrée Alice par la fenêtre.* (*ibid.*)  
 (31) *A cette époque-là travaillaient dans cette usine des ouvriers portugais.* (*ibid.*)  
 (32) ? *A cette époque-là travaillaient des ouvriers portugais dans cette usine.* (*ibid.*)

Jonare (1976, p.62) は、収集した約 2800 の倒置構文の中で、文末に前置詞句補語を有するものは 2 例しか無かったと述べている。また、東郷・大木 (1987, p.4) も、収集した 230 例以上の倒置構文の中に、倒置主語の後に状況補語を有するものは一つも無かったと述べている。東郷・大木 (1986, p.4) によると、これは以下のように説明される。倒置主語は焦点であるが、焦点は文末に来るのが自然である。しかし、文末に他の要素が存在すると、どちらを焦点とするかに関して矛盾を生じて、容認度が低下するのである。

これに対して、関係節では、倒置主語の後に他の要素が現れることは、特に主語が短い場合には、それほど希ではない。表 6 は、副詞句か前置詞句を一つ伴う関係節における語順に関する Wall (1980, p.102) の統計である。原典では動詞の法と時制に基づいて分類した数字を挙げてあるが、ここでは、合計を計算して掲載する。

表 6: 関係節での副詞句・前置詞句を含めた語順 (Wall (1980, p.102)に基づく)

語順 \ 語数	1~2	3~6	7以上	合計(百分率)
V S C	47	25	0	72 (10%)
V C S	20	80	29	129 (17%)
S V C	326	133	26	485 (65%)
S C V	9	1	0	10 (1%)
C V S	2	11	2	15 (2%)
C S V	6	2	0	8 (1%)
Vaux C Vpp S	2	3	1	6 (1%)
S Vaux C Vpp	12	6	3	21 (3%)
合計	424	261	61	746 (100%)

(S: 主語、V: 動詞、C: 副詞句・前置詞句、Vaux: 助動詞、Vpp: 過去分詞)

Jonare の場合には収集した倒置構文全体での比率であるのに対して、Wall の場合には副詞句か前置詞句を一つだけ含む倒置構文に対する比率なので、両者を数値的に比較することはできない。しかし、関係節においては倒置主語の後に他の要素が来ることはそれほど希ではないと言える。以下、Wall が引用している例を若干挙げておく。

(33) Les vaccinations (...) dont bénéficie l'humanité aujourd'hui (in Wall, 1980, p.106)

(34) le succès que remportaient les chips sur le marché britannique. (*ibid.*)

(35) Les sentiments qu'a Marc pour moi vous sont-ils connus? (*idem*, p.109)

(36) Ce fut l'idée que prit Hélène de lui dans le wagon qui les portait vers l'humble coin du Finistère. (*ibid.*)

また、Korzen (1996)によると、主節平叙文において時を示す句を倒置主語の後にもってきた(37)は不自然であり、倒置主語の前にもってきて(38)のようになさなければならない。

(37) ? *Devant la gare stationnait la belle voiture de votre père, tous les dimanches.*

(Korzen, 1996, p.36)

(38) *Devant la gare stationnait, tous les dimanches, la belle voiture de votre père.*

(*ibid.*)

ところが、それに対して、関係節においては(39)のように時を示す句が倒置主語の後に来ても構わないのである<sup>8)</sup>。

(39) *L'endroit où était garée la voiture de votre père, avant-hier, était mal choisi.*

(*idem*, p.35)

このことも主節平叙文では倒置主語の後に他の要素が現れることが困難なのに対して、関係節ではそうではないことを示している。この事実は、倒置主語を焦点とする考え方では説明できない。

### 3.5. まとめ

本節では、以下の事実を見た。1) 制限的關係節は概ね前提領域であり、焦点と相容れない。2) 関係節における倒置主語は前方照応的に解釈できる。3) 関係節では、固有名詞や人間を指す単数の名詞句が倒置しやすい。4) 関係節は倒置主語の後に容易に他の要素を許容する。これらに基づいて、制限的關係節における文体的倒置は主語の焦点化ではないと考えられることを論じた。

## 4. 倒置主語の individuation

### 4.1. 主語の指示性

Korzen(1983)は、主語が不定代名詞 *quelqu'un* だと文体的倒置が妨げられると述べている。

(40) *Voici la chambre où a couché {? quelqu'un / mon oncle}.* (Korzen, 1983, p.66)

実際、以下の作例でも、不定代名詞が倒置しにくいことが確認できる。

- (41) Celui que François a tué, c'est Jean.
- (42) Celui qu'a tué François, c'est Jean.
- (43) Celui que quelqu'un a tué, c'est Jean.
- (44) ? Celui qu'a tué quelqu'un, c'est Jean.

他の不定代名詞も、やはり倒置しにくい。例えば、rien について、Fuchs(1997, p.154)は以下の例を挙げている。

- (45) Le fournisseur des ateliers royaux de tapisserie, décorateur proluxe, exécute des allégories des saisons *que rien ne sauve de la banalité* (Fuchs, 1997, p.154)
- (46) \* (...) *que ne sauve de la banalité rien* (*ibid.*)

また、Wall(1980, p.81-82)は、対象としたコーパス中に *tout le monde* を倒置している例を見いだせなかったと述べている。

- (47) elle a ses évidences intimes, *que tout le monde a et qui par conséquent ne prouvent rien.* (Wall, 1980, p.82)
- (48) C'est ce que tout le monde me dit. (*ibid.*)
- (49) ces nouveaux technocrates dont tout le monde parlait (*ibid.*)

しかも、Wall も指摘しているとおり、ここでの動詞は意味的に軽く、倒置が好まれる種類のものであるにもかかわらず正置されている。Fuchs(1997, p.154)は(49)に倒置を適用すると不自然であるとしている。

- (50) ??? (...) dont parlait tout le monde. (Fuchs, 1997, p.154)

tout le monde や personne に関しても倒置を適用しにくいことを以下の作例で確認した。

- (51) Celle que François aime, c'est Marie.
- (52) Celle qu'aime François, c'est Marie.
- (53) Celle que tout le monde aime, c'est Marie.
- (54) ? Celle qu'aime tout le monde, c'est Marie.
- (55) Celle que personne n'aime, c'est Marie.
- (56) ? Celle que n'aime personne, c'est Marie.

これは、不定代名詞を焦点にしにくいと考えることによって説明できると思われるかもしれない<sup>9)</sup>。しかしながら、第2節で見たように、制限的關係節にこの説明を適用するわけにはいかない。その上、そもそも、(41)-(44)や(52)-(56)で挙げている作例では關係節の内容は前提されており、焦点とは相容れない。

更に、Fuchs(1997, p.155)によると、(57)のような不特定の主語や、(58)のような総称的な主語もほとんど常に正置される。

- (57) Elle nous étonne parce qu'elle s'étonne. Rien n'est plus délicieux que de partager la surprise *qu'un écrivain se fait à lui-même* (Le Monde)  
? (...) la surprise que se fait à lui-même un écrivain (Fuchs, 1997, p.155)
- (58) Dans un milieu où *les talents s'arrachent*, les meilleurs techniciens ont tenté en vain de s'approprier le champion (Le Monde)  
? Dans un milieu où s'arrachent les talents (*ibid.*)

以上より、不定の主語は倒置しにくいと考えられる。

## 4.2. individuation

3.3 で見たように、Wall(1980)は、関係節においては、主語が短い場合に限定すると、固有名詞や人間を指す単数の名詞句が倒置しやすいと述べている。また、Fuchs(1997)も人間を指す主語が倒置しやすいと述べている。そして、4.1 では、不定代名詞や非指示的な名詞句は倒置しにくいことを見た。関係節において倒置を促すこれらの要因は、Hopper & Thompson(1980, p.253)の *individuation* を構成する要因に数え上げられているものである。

(59) INDIVIDUATED	NON-INDIVIDUATED
proper	common
human, animate	inanimate
concrete	abstract
singular	plural
count	mass
referential, definite	non-referential

(Hopper & Thompson, 1980, p.252)

Hopper & Thompson(1980)においては、*transitivity* を構成する要因として目的語の *individuation* を考えている。しかし、この *individuation* という概念をもともと提唱した Timberlake(1977)においては、ロシア語における否定生格や動詞に語彙的に要求される生格の消失の過程を促進する要因として考えられたものであった。そこでは、*individuation* は、名詞句の指示対象が個体として概念化されている度合い、逆に言うと、指示対象が数量化されにくい度合いを表すものであった。本稿では、Hopper & Thompson(1980)を受けて、名詞句の指示対象が背景から明確に区別されて際立っている度合いと考える。

ここで、これまでの観察を、関係節においては *individuation* が高い主語名詞句の方が倒置しやすいとまとめることができる。これを説明するために以下の仮説を提案する。

(60) 制限的關係節においては、以下の (a) と (b) を満たす場合に、文体的倒置が適用される。

- (a) 主語名詞句が先行詞の指示対象の確定に寄与している程度が動詞よりも高い。
- (b) 動詞は主語の先行詞に対する関係を表しているにすぎない。

名詞句の *individuation* が高ければ、それだけその指示対象は認知的に際立っており、他の指示対象を確定するためのいわば参照点として機能しやすい。例えば、*individuation* の極めて高い固有名詞「太郎」は、*individuation* の低い不定代名詞「誰か」よりも参照点として有効に機能する。ある女性を指示するのに、「太郎の妻」と言うと指示対象はほぼ一意的に確定するが、「誰かの妻」では指示対象は不明確にしか確定されない。

制限的關係節は、先行詞の指示対象を關係節の内容で制限していくという機能を有している。そこで、主語名詞句は *individuation* が高ければ高いほど、先行詞の指示対象を確定するための参照点として機能しやすいと考えられる。つまり、先行詞の指示対象の確定に寄与する度合いが高くなる。よって、このような主語名詞句は、仮説 (60) により、倒置しやすいことになる。逆に、*individuation* の低い主語の場合には、先行詞の指示対象の確定に対する寄与が小さくなり、倒置しにくくなる。

以上の議論を、(41)～(44) (= (61)～(64)) に適用すると以下ようになる。

- (61) *Celui que François a tué, c'est Jean.*
- (62) *Celui qu'a tué François, c'est Jean.*
- (63) *Celui que quelqu'un a tué, c'est Jean.*
- (64) ? *Celui qu'a tué quelqu'un, c'est Jean.*

關係節の主語が固有名詞 *François* である場合、主語の方が先行詞 *celui* の指示対象の確定に対する寄与が大きく、動詞 *a tué* は主語の先行詞に対する関係を表しているにすぎないと捉えることが可能なので、文体的倒置を適用しても

自然である。勿論、逆の捉え方をすることも可能なので正置も自然である。ところが、主語が不定代名詞 *quelqu'un* の場合には、主語は先行詞の指示対象の確定にはほとんど寄与していない。むしろ、ほとんど、動詞の部分が表している「殺された」という情報だけで先行詞の指示対象は確定されている。そのため、文体的倒置は不自然になると説明できるのである。

(51)～(56) (= (65)～(70)) もほぼ同じように説明できる。

- (65) *Celle que François aime, c'est Marie.*
- (66) *Celle qu'aime François, c'est Marie.*
- (67) *Celle que tout le monde aime, c'est Marie.*
- (68) ? *Celle qu'aime tout le monde, c'est Marie.*
- (69) *Celle que personne n'aime, c'est Marie.*
- (70) ? *Celle que n'aime personne, c'est Marie.*

主語が固有名詞の場合には、先行詞の指示対象の確定に対する主語の寄与が大きく、動詞は主語の先行詞に対する関係のみを表していると捉えることが可能なので、文体的倒置は自然である。それに対して、主語が不定代名詞の場合には、指示対象が漠然としており、先行詞の指示対象の確定に対する寄与は小さい。それよりも動詞の部分によって表されている「愛されている」とか「愛されていない」という情報の方が先行詞の指示対象の確定に寄与している。このため、文体的倒置は容認度が低いのである。

#### 4.3. 現象の説明

2.1 で見たとおり、関係節においても長い主語の方が倒置しやすい。このことも、仮説 (60) と合致する。なぜなら、長い主語ほど、含んでいる情報量の多さから、先行詞の指示対象の確定に対する寄与が大きくなると考えられるからである。3.3 で見たように、*individuation* の高い主語の方が倒置しやすい傾向が 1～2 語からなる主語に限った統計で現れているが、このことは、主語の長さが *individuation* よりも倒置を促す要因として強いことを示唆している。

2.2 では、動詞が長くなるほど文体的倒置が適用されにくいことを見たが、これも仮説(60)と合致する。動詞が長くなると、情報量が多くなり先行詞の指示対象の確定に対する寄与が大きくなるだけでなく、主語と先行詞との間の単なる関係を表しているとは捉えられなくなるからである。また、存在を表す動詞や先行詞から想起されやすい動詞の方が文体的倒置を引き起こしやすいことも、このような動詞は主語と先行詞の関係を表すものとして捉えられやすいためと説明される。

なお、主節平叙文と関係節では文体的倒置に現れやすい動詞の範囲が異なっている。例えば、Fournier(1997, p.117)は、文頭に前置詞句を有する主節平叙文での文体的倒置においてもっとも頻繁に現れる動詞を大きく二つに分類している。一つ目は前置詞句で表される時空間での位置に主語の指示対象を位置づけるものである。これには、以下のものがある。

・ 動的位置決定:

- ・ 移動動詞: arriver, sortir, monter, venir, surgir, passer.
- ・ 事態の開始と終了を示す動詞: naître, mourir, commencer, apparaître, avoir lieu, s'ouvrir, dater.
- ・ 静的位置決定 (=être): figurer, reposer, s'ouvrir, être + ppé.

これは、ほとんど存在や出現を表す動詞であると考えることができる。二つ目は、前置詞句と主語の関連を示す動詞であるが、これには以下のものがある。

- ・ 後続・付加: se succéder, s'ajouter, se mêler, répondre.
- ・ 等価: répondre, correspondre, s'opposer.
- ・ 依存: résulter, dépendre.

Fournier は、これらの動詞を、時空間での位置づけから派生した抽象的な位置づけを表す動詞と見なしている。主節平叙文に現れやすいこれらの動詞は、主語の指示対象を談話内世界に導入するのに適した意味を持っている。これ